

令和4年度 教頭部会研究計画

1 研究主題

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり
—郷土を愛し 郷土との関わりを深め 未来を切り拓いていく人財の育成—

2 研究主題について

今、人生100年時代を迎えようとしている。また、超スマート社会（Society5.0）の実現に向けて人工知能（AI）やビッグデータの活用などの技術革新も急速に進んでいる。人口減少・高齢化・グローバル化などの進展、子供の貧困問題、社会経済的な課題や地域間格差等、解決の見通しが難しい課題が山積している。

こうした社会の変化を乗り越え、全ての人が、豊かな人生を生きるために必要な力を身に付け、活躍する上で、教育の力の果たす役割は重大である。未来を力強く生きるために、自ら主体的に行動し、他者と協働しながら新しい価値を生み出し、課題の解決や改善をしていく「生きる力」を今こそ、子供たちに育てていく必要がある。そのためには、新しい学習指導要領の趣旨を受け、社会の変化を柔軟に受け止め、社会に開かれた教育課程を実現し、これまで以上に子供たちにとって魅力ある学校づくりを推進してことが重要になってくる。

学校運営を担う私たち副校長・教頭は、リーダーシップの発揮や職務遂行にあたっての自覚を持ち、自らの資質能力の向上を目指す研究と修養を深め、共有し、改善していくことが責務だと考える。

そこで、研究主題を「未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり」と設定した。

「未来を生きる力」とは、子供たちが時代の進展・変化に的確に対応する「生き抜く力」であり、自ら積極的に未来を創造していく意欲を持ち行動する「生きる力」である。もちろん、平成元年度までの研究主題に掲げられていた「豊かな人間性と創造性」は「生きる力」の中心的なものと考えている。「豊かな人間性」とは、自らを律しつつ他人とともに協調し、他人を思いやる心、人間としてのやさしさや人との絆、きめ細やかな感性、夢をもつ想像力などを示している。「創造性」は、学んだことを生かして新しいものを生み出そうとする夢をもち、困難な中であっても粘り強く、その困難に挑戦し乗り越えていく意欲などである。特に、人との絆を大事にし、自分の個性を生かしつつ、自ら考え行動し、他者と協働しながら現状を打開することを、引き続き重視し発展させることをねらいとする。

学習指導要領の前文にもあるように、「よりよい学校を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現にむけて、副校長・教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組んでいくことが重要である。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼してもらえ「魅力ある開かれた学校づくり」に取り組む必要がある。

同時に、新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のため、学校における働き方改革の着実な具現化を図り、教師にとっても「魅力ある学校」となるように努めていく必要もある。教職の魅力を発信し、新たな時代の教育に対応できる質の高い教師の確保につなげていくことも重要である。

3 キーワード「自立・協働・創造」について

第3期教育振興基本計画の「2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」には、第2期教育振興基本計画で掲げた「自立」「協働」「創造」の3つの方向性を実現するための生涯学習社会の構築を目指すという理念を引き続き継承し、教育改革の取組を力強く進めていく必要がある。」と示されている。第2期計画で、我が国に求められているものは、「自立」「協働」「創造」であると明確に示されていたこの3つの方向性は、第12期の研究主題でも、キーワードとして継承している。そのキーワード「自立・協働・創造」については、次のように捉える。

「自立」とは、子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくことである。「協働」とは、個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かして、ともに支え合い、高め合い、社会に参画することである。「創造」とは、自立・協働を通じて更なる新たな価値を生み出すことを意味する。

4 サブテーマについて

徳島県では未来を担う全ての「人」に、徳島が誇るべき歴史と風土、脈々と受け継がれてきた「進取の気質」をしっかりと継承するとともに、未知なる世界を自ら切り拓き、「持続可能な社会」を創造する力を育む「徳島ならではの」未来教育を実践するため、「徳島教育大綱」が策定されている。その基本方針として、大きな夢や高い目標を持って、困難にぶつかっても挑戦し続け、未来を切り拓いていく、本県の宝である「人財」の育成をめざすことが掲げられている。これらのことを踏まえ、サブテーマを「郷土を愛し 郷土との関わりを深め 未来を切り拓いていく人財の育成」と設定した。

「郷土を愛する」とは、単に郷土を愛しているという段階でとどまるのではなく、歴史的・文化的な共同体としての郷土を愛し、持続可能な社会の主体者として寄与することある。「郷土との関わりを深め」とは、郷土のために自立して持続可能な社会の実現に向けて取り組むために、郷土の人々と協働して問題解決に取り組むことである。そして、未来の社会をよりよくするという使命感をもち、多様性を認め合い、他者と協働しながら、未来を切り拓いていく人財を育成する魅力ある学校をつくることが重要である。

5 研究推進にあたって

全国公立学校教頭会では、全国統一の研究主題を設定し、半世紀近くにわたり継続的・組織的に取り組んできた。本年度は、第12期全国研究主題を掲げての研究の最終年度となる。これまでの2年間は、コロナ禍により多くの制限があったなかでも、徳島県小中学校教頭会として、課題解決を目指していく研究の「継続性」、副校長・教頭がともに情報や様々な教育実践を共有・深化していく「協働性」、副校長・教頭として学校の様々な教育活動にどのように関わっていくかという「関与性」に焦点を当てながら、実践研究を進めてきた。

徳島県小中学校教頭会では、魅力ある教頭会を目指し、未来を切り拓いていくための変革を進めてきた。本年度は、改革の2年目であり、さらに一歩進め、その成果を令和5年度四国地区小中学校教頭会研究大会（徳島大会）につなげていきたい。

6 研究の基本目標について

日本国憲法・教育基本法・学習指導要領の理念に基づき、子供たち一人一人に、未来を切り拓いていくために必要な資質・能力を育む学校教育を実現していくことが、私たちの大きな使命である。その使命を果たすために私たちは、副校長・教頭の職務内容の研究を通して力量を高め、国民の期待に応える魅力ある学校づくりに努めることが必要となる。

以上のことから、次のことを研究の基本目標とする。

○教育理念に基づく学校教育の実現

特色ある学校づくりを展開し、生きる力を育む学校教育の実現を目指す。

○副校長・教頭としての力量の向上

広い視野に立って学校運営が行えるよう、学校教育に対する識見を深める。

○学校の社会的役割の推進

国民の期待に応える魅力ある学校づくりを推進する。

7 研究の基本方針について

実践研究を進めるにあたっては、次の3点を基本方針とする。

○学校教育の課題の解決に努める

私たちの研究は、国民の期待に応え、教育基本法及び学校教育法の諸法規に定められた教育の目標を達成することを究極の目的とする。そのために自ら職能を高め、学校現場が抱えている課題の解明に努める必要がある。

○副校長・教頭の職務内容や職務機能の追求する

学校運営において、副校長・教頭としての関わりを大切にし、その職務内容を実践的に追求するとともに職務機能の充実を図ることが大切である。

○研究成果を政策提言活動（要請活動）に生かす

研究活動と政策提言活動（要請活動）は教頭会の活動の2本柱である。研究の成果を政策提言活動に生かし、教育環境の整備に役立てていくよう努める。

8 研究の方法について

本年度は、第1課題から第5課題については、徳島県小中学校教頭会において提言発表を行い、その後グループ協議を行うことにより研究を深める。また、研究を進めるにあたっては、副校長・教頭が日々実践していることを基にし、「継続性、協働性、関与性」に焦点を当てた実践的研究を行う。第6課題については、配信動画を視聴することにより研修を行う。

(1) 研究課題について

第1課題 教育課程に関する課題

- 各校の実態を踏まえた教育課程の編成
- カリキュラム・マネジメントを軸とした学校改善
- 第2 課題 子供の発達に関する課題
 - これからの社会をたくましく生き抜く力，資質・能力の育成
 - 児童生徒に適切な対応や指導を行うための校内体制づくり
- 第3 課題 教育環境整備に関する課題
 - 防災体制，安全管理に関わる環境整備の推進
 - G I G Aスクール構想の実現に向けて学校環境の整備
- 第4 課題 組織・運営に関する課題
 - 地域とのつながり，学校間の子ながりの構築に向けた方策
 - 様々な状況に適切に対応できる危機管理体制の強化
- 第5 課題 教職員の専門性に関する課題
 - 教職員の協働体制づくりと，学校運営への参画意識の高揚
 - 教職員の力量の向上につなげる校内研修体制づくり
- 第6 課題 副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題
 - 多様化，複雑化する課題への組織的な対応の在り方
 - ワーク・ライフ・バランスを重視した労働環境づくり

(2) 継続性, 協働性, 関与性に焦点を当てた実践研究

実践研究を進めるにあたっては、「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当てる。

「継続性」に焦点を当てた研究とは，単位教頭会・副校長会組織に改編があっても，これまでに解明されたことは何か，残された課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進めていくことである。

「協働性」に焦点を当てた研究とは，単位教頭会・副校長会における組織的な研究として，同じ副校長・教頭としての同僚性を発揮し，協働的に研究を進めていくことである。

「関与性」に焦点を当てた研究とは，副校長・教頭として，何をすべきか，どうあるべきか，どう関わるべきかを念頭に置き，単位教頭会の課題を勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ，そこで得られた成果や課題を単位教頭会に反映させつつ研究を進めていくことである。

(3) 分科会の提言について

- ① 研究の成果をふまえた継続的研究を発表する。
- ② 各単位教頭会の組織的・協働的研究とする。
- ③ 提言に当たっては，教頭としての関わりを明確にする。
- ④ 本年度については，鳴門市小学校教頭会が第2 課題，海部郡小学校教頭会が第3 課題において提言を行う。
- ⑤ 大会要項に載せる提言の柱立ては，四国地区小中学校教頭会研究大会（香川大会）に準ずる。